

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

1 次の記事を読んで、問一～問七に答えよ。

- A 「共生」という言葉をあちこちで見かけるようになった。生物学的には共生にはいくつかのバリエーションがある。共に利のある「相利共生」、一方が得をし、他方に利害のない「片利共生」、そして一方が得をし、他方が損をする場合はこれを「寄生」と呼ぶ。
- B 共生に優劣をつけたいのではない。経済が持続的に成長し、高齢化も進んでいない時代には、ほとんどの人たちが自己責任で生きていくべきだ。一部の人たちが保護を受け、得をしても社会的に許容された。だが、経済が衰勢を強め、少子高齢化が明らかになると、受益者に対する社会的な反発が強まる。受益者を特定の層に限定すれば「寄生」の誤解をまねき、人びとの批判を生む。要するに、時代に即した「共生のかたち」が、いま問われているのである。
- C 経済人類学者カール・ポランニーは、金銭的欲求にかぎらず、さまざまな欲求を満たすために必要な物的手段を提供する過程の全体を経済と定義した。この定義がシユウイツなのは、交換に加え、相互扶助的な「互酬」、手にした財をいったん集めこれを配り直す「再分配」のいずれもが欲求充足に必要な物的手段の提供、すなわち経済だと位置づけた点だ。ポランニーはいう。修道僧は金もうけではなく宗教的理由で交易し、修道院をヨーロッパで最大の交易施設にした。トロブリアンド諸島のクラ交易は美への欲求が、クワキウトル族にとっては名誉への欲求が経済活動の目的だった、と。
- D 経済は人類の歴史を貫いている。交換が支配した「近代」が終わるからといって、経済がなくなるわけではない。経済の編成原理として、交換ではなく、互酬や再分配がより特別な地位を占めるようになるのだ。共生のかたちと同時に、共生の土台にある互酬や再分配といった経済のかたちもまた問い返されるわけである。
- E こうした変化の兆候は「身近」で起きる。僕の住む神奈川県小田原市では、この10年来、加藤憲一市長の肝煎りで「ケアタウン」事業が行われている。祭り文化が育んだ強固な相互扶助機能という地域特性を生かし、行政と自治会、社会福祉協議会、NPO、企業等が連携して、地域課題の解決に取り組んできたのだ。高齢者や子どもの居場所づくり、ゴミ出しなどの生活支援に防災、防犯、「ケア」気にかける」を合言葉に、行政はすべての自治会連合会のエリアで協定を結んで事業を展開した。
- F ケアタウンでは対象を高齢者に限定しない。子どもや障がい者も含め、幅広い層を受益者にする。また、地域への丸投げにせず、支援の届きにくい住民にもアウトリーチするため、地域福祉相談支援員を試験的に配置すること、庁内の関係部局が組織横断的に対応できる体制を整えることについて議論が進んでいる。
- G 小田原が追求しているのは、行政も含めた地域全体で住民の生存・生活ニーズを互酬的に満たしあう仕組みづくり、あえていえば自治の再生である。しかも、受益者と負担者の関係は a だ。汗をかく側が時間の経過とともに受益者にまわり、長期的に見ると誰もがアシストしたり、されたりの実験を持つ「X」の地域社会をめざしている。
- H 自治をふつうは経済活動と呼ばない。だがポランニーを参考に定義すれば、これは「利益型経済」とは異なる、^①「共生型経済」が育まれつつあるということである。思えば自然なことだ。僕たちが利益を必要とするのは、貨幣によって消費し、生存・生活のニーズを満たし、人間らしく生きるためだ。そのニーズを利潤動機や貨幣とは異なる形で満たせるのであればそれでもいい。「利益型経済」の地位が低下し、それを「共生型経済」が補完・代替すること、いわば経済の欲求充足の力点が劇的に変化し始めているのである。
- I これは単なる古典的自治へのカイキではない。^②近年、協同組合に象徴される経済組織の動きは象徴的だ。協同組合とは、利益を出すことではなく、共通の経済的・社会的・文化的なニーズを満たすために、人びとが出資して共同で所有し、民主的に管理する経済組織だ。全国に3万を優に超える協同組合があるといわれるが、^③ b なつながりを強めるため、2018年に日本協同組合連携機構が結成された。組織の垣根を越え、地域ニーズを満たす新たな受け皿ができるこうした動き自体、社会の編成原理が共生型経済に変わりつつあることの一ツタンを示すものだ。
- J 昨年10月の消費増税も同様である。使途の目玉は全所得階層の幼保無償化だ。これも自己責任で費用をしぼり出していた時代から、近世のコミュニティーのような、負担を低所得層も含めた全構成員で分かち合い、できるだけ均等に受益を配分する「共生型経済」の時代への移行と見ることができる。ミクロ、マクロの両面で経済の質的な転換が起き始めている。
- K 見せびらかしを意味する c 消費、欲求こそが「利益型経済」の原動力だった。だが、成長の停滞、少子高齢化とともに生じた、生存、生活という本源的欲求の充足の危機は、財政や国、地域のありかた、そして経済のありかたを根底から変えつつある。歴史を動かすのは経済ではない。生きる、暮らすための必要なのである。

(井手 英策、『毎日新聞』二〇二〇年二月二七日「経済のかたち」より)

(注) A～Kは、問題作成者が便宜的に形式段落に付した記号である。

国語「問題その二」

(21-1A)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

問一 傍線部①～③のカタカナを漢字に直せ。

- ① シュウイツ ② カイキ ③ イツタン

問二 く 入るべき適語を、次のア～オから一つずつ選び、記号で記せ。

- ア 顕示的 イ 可変的 ウ 普遍的 エ 横断的 オ 持続的

問三 に入るべき適語を、これより前の本文から漢字四字で書き抜け。

問四 傍線部(1) 「利益型経済」、同(2) 「共生型経済」について、それぞれの目的を本文より十字以内で書き抜け。

問五 傍線部(3) 「経済の欲求充足の力点が劇的に変化し始めている」とあるが、どのように変化しているのか。五十字以内で説明せよ。

問六 本文を四つの内容にまとめた場合、形式段落A～Kをどのように区分するのが適当か。次のア～オから一つ選び、記号で記せ。なお、「」は内容のまとまりを表す。

- ア 「AB」 「C」 「DEFGHIJ」 「K」
イ 「AB」 「CD」 「EFGHIJ」 「K」
ウ 「AB」 「CD」 「EFGH」 「IJK」
エ 「ABC」 「D」 「EFGHI」 「JK」
オ 「ABC」 「DEFG」 「HIJ」 「K」

問七 この文章の題目として最も適するものを、次のア～オから一つ選び、記号で記せ。

- ア 経済から福祉へ イ 利益型から共生型へ ウ 経済活動の活性化
エ 少子高齢化社会への課題 オ 自治会の再生強化

国語「問題その二」

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

2 次の文章を読んで、問一～問六に答えよ。

① 最初に起こるべきことを熟慮し、あらゆる場合を想定していたならば、事を始めても、その場合に迷うことなく、素早く対処することができる。最初によく熟慮していなかったら、思いがけない事柄が起こって、どうするか迷うばかりである。政治の世界は **A** であるといわれるが、確かに現実は何が起こるかわからない。

しかし、最初にあらゆる場合を想定しておけば、意外に思われることも、あらかじめ想定していたことの応用問題として解け、その対策も立てやすいのである。

このような事柄においては、進むときすなわち攻撃するとき、退くときすなわちボウギョ^①するとき、待機するときすなわち一度戦いを終えて次の戦いに備えるとき、そのときを知ることがリーダーにとつてもつともたいせつなのである。進むときがきたら、カカンに進まねばならない。攻撃するときがきたら、思いきって攻撃せねばならない。必ず事を成そうとしたならば、そういう決戦のときがくる。それがいわゆる修羅場^③であろう。食うか食われるかの血なまぐさい戦いである。それは必ずしも戦争のことをいうわけではない。たとえば会社でも、ある会議であるいはある交渉で、会社の運営がすべて決まるときがある。これがいわゆる決戦の場であり、修羅場である。

リーダーはこのような修羅場において、千人力を發揮しなくてはならない。私が知っている優れた実践的な力をもっている学者はこの修羅場において強いのである。ふだんはぼんやりして、酒ばかり飲んでいいる人が、この修羅場になると、目は輝き、顔は赤く燃えて、その口から矢つぎ早に相手を振じ伏せずにはおかないような鋭い言葉が飛び出してくるのである。性格的にこのような修羅場に耐えられない人もいる。知識人の中で、このような修羅場に力を發揮する人はむしろ少ないといえるが、このような修羅場に耐えうる人間でないと、やはり真のリーダーにはなれないと思う。もちろん穏和な人格円満な人も組織の長となることはできるが、それは組織がいちおうある任務を果たしたときである。その組織がまだ成長の段階にあり、修羅場をくぐり抜けて、発展していかなければならないときには円満だけのリーダーでは困る。

もちろん人格円満な、いつもニコニコしている人間が組織をまとめていくうえにおいては必要にちがいない。しかし、もしその人格円満な人がリーダーにふさわしい人間であるならば、組織が伸るか反るか^②の運命に臨むとき、ふだんは人格円満であり、ニコニコ笑っているリーダーが鬼となるのである。鬼となることによってはじめて、彼はこの食うか食われるかの戦いに勝つことができるのであろう。このような戦いには、緻密^④に計算する理性や、長いあいだかかって整えられた戦略が勝敗を決めるであらうが、もう一つはつきりいえるのは、やはりリーダーの気迫であらう。二匹のサルが出会うと、必ずお互いの優劣を確かめる。その場合、サルの上下を決めるのは、体力や知力、場合によっては徳力かもしれないけれども、それ以上にそのサルがもっている精気のようなものがその勝負を決めるのである。

先に述べた哲学者の西田幾多郎^⑤はある友人の学者が評して、彼はエスプリザニモーが強い男だといった。エスプリザニモーとは、訳して動物精気という。西田幾多郎の体内から怪しげな動物精気が発散しているのを、その友人は感じたのである。西田幾多郎は哲学者であり、哲学者はやはり理性の人であるべきなのである。その最高の哲学者、日本でいちばん偉い哲学者が、強烈なるエスプリザニモーの持ち主であったのである。彼のあの難解な思弁に満ちた哲学も、そして多くの才能ある人間を彼のもとに集め、京都学派の大親分になれたのも、そのエスプリザニモーのせいであらうか。

私は政治家に多くの知人をもっているが、共通に感じるはその動物精気の激しさである。私には政治家というものは、やはりふつうの人よりははるかに強い動物精気をもっているように思われる。最近政治家には二世の人が多いが、二世の人は一世の人のような動物精気をもち合わせていないことが多い。さまざまな修羅場をくぐってきた一世の人たちには、とくに強い動物精気を感じられる。この動物精気ゆえに、彼らはさまざまな修羅場をくぐり抜けて、今日の地位を獲得することができたにちがいない。また、そのエスプリザニモーはさまざまな修羅場を経験して、いよいよ深く、その政治家の体内に定着したのであろう。

リーダーは、このようにすすむべきときにはすすみ、戦うべきときには戦い、容赦なく勝利を収めねばならない。そのような決戦の場において、人情を入れることは禁物である。人情は決戦の命とりになることがしばしばあるのである。しかし、仕事はいつも順調であるとは限らない。戦いはいつも勝利に終わるとは限らない。退くべきときもあるのである。この状況をリーダーはいち早く感知しなくてはならない。いったん戦いに負けても、また矛を収めて、陣形を立て直して、次のときを待たねばならない。

むしろリーダーのむずかしさは、戦局利あらず膠着状態が続いて待たねばならないときである。このようにいったん味方が類勢^③になると、弱い者は必ず音を上げるのである。そして不平不満がいろいろ出てくるのである。しかし、先に述べたような強い人間的絆で結ばれた組織は、そういう類勢^④のとき、あるいは持久のときに耐えられるのである。こういうときに指揮官はけっして希望を失ってはならない。あくまで事は成ると信じ続けて、事にあたらねばならない。待てば必ず機会は向こうから訪れてくるのである。その向こうから機会が訪れるときをじーつと待つのである。戦況が類勢に落ち込み、味方の人々が不安になり、志を失うのを見るのはリーダーとして辛いことであらう。しかしリーダーはあくまでそういう味方の人たちに、やがて事態はよいほうに打開せられるにちがいないと説き、シンボウ強くそのときを待たねばならない。

(梅原猛、『現代を生きる』より)

国語「問題その四」

(21-1A)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

(注) 西田幾多郎 文学博士。日本を代表する哲学者。京都大学名誉教授。代表著書『善の研究』

問一 傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで示し、カタカナを漢字に直せ。

- ① ボウギョ ② カカン ③ 修羅場 ④ 緻密 ⑤ シンボウ

問二 傍線部(1) 「最初に起こるべきことを熟慮し、あらゆる場合を想定」することの理由を述べている箇所を、本文から四十五字以内で抜き出し、はじめと終わりの七字で記せ。(句読点を含む)

問三 傍線部(2) 「エスプリザニモーとは、訳して動物精気という」と筆者は訳しているが、「動物精気」と同じ意味となる表現を文中より十字以内で書き抜け。

問四 傍線部(3) 「先に述べたような強い人間的絆で結ばれた組織」とはどのような組織をいうのか。文中の語句を用いて六十字以内で説明せよ。

問五 傍線部(4) 「類勢のとき」とはどのようなときか、説明している語句を文中より二十五字以内で書き抜け。

問六 問五の傍線部Aに適用する慣用句を次のア～カより選び記号で記せ。また、波線B・Cと同様の意味を表す慣用句を次のア～カより選び、記号で記せ。

- ア 短気は損気 イ 一日千秋 ウ 泣いて馬謖ばしやくを斬る エ 情けは人のためならず オ 捲土重来
カ 一寸先は闇

国語「問題その五」

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

3

次の文章を読んで、問一～問五に答えよ。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まらずだよふ

若山牧水『海の声』

旅をこよなく愛した歌人、若山牧水は孤独を愛した歌人でもあった。家族を大切にした。友人たちと語り合い、飲み合うことをまた何より喜んだ歌人でもあった。しかし、牧水の旅は、孤を確かめ、孤としての寂しさを確認する旅でもあった。日常生活のなかで居ても立ってもいられないようなセツパクカンのなかで旅に出かけた牧水には、多くの研究者が指摘することく、未だ見ることのない何かに対する「あくがれ」があったというのである。

「もの思へば沢のほたるもわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る」と詠ったのは、平安朝の歌人、和泉式部であった。「あなたを思い、物思いに耽つていると、沢に舞っている螢でさえ、私の身から抜け出していった魂かとも思われることよ」という意味であるが、ここにも詠われているように、「あくがれ」はわが身からふらふらとさまよい出ていくものである。^①身の裡から「あくがれ」、さまよい出てゆく魂を追うように、牧水の旅はあったのかもしれない。

この一首についてはこれまで多くの議論がなされてきた。難解なところは何もない歌だが、さまざまな意見が飛び出すほどに、この一首はミリヨクに満ちた一首なのだとすることができよう。

第二句「哀しからずや」は疑問か反語か。白鳥は哀しくないだろうか、空の青にも海の青にも染まることなく漂っていて、ととれば疑問になる。「哀しくないはずはないではないか」と一歩踏みこむと反語となる。しかし、鑑賞者の立場からすると、反語とどるのは煩わしすぎるし、押しつけがましすぎると感じる。ここは軽い疑問ととっておきたい。

他にも、この白鳥（初出では「はくてう」と読ませていた）は、空を飛んでいるのか、海に浮かんでいるのかという疑問。またそれは一羽なのか複数なのかと問う人もいる。些細なことのようなのだが、一首全体の鑑賞には、けっこう大事な問題でもある。いろいろな意見があることを承知で、私の読みは、白鳥は鷗、それも複数いて、あるものは空を飛び、あるものは海に漂っているととっておきたい。

空の青にも海の青にも染まりきれない白鳥に、牧水はどこかで自分の姿を重ねているだろう。世間という青にである。^③そこに青年牧水の孤独を見る思いがする。

(永田 和宏、『近代秀歌』より)

問一 傍線部①、②のカタカナを漢字に直せ。

- ① セツパクカン ② ミリヨク

問二 傍線部(1) 「身の裡から『あくがれ』、さまよい出てゆく魂を追うように、牧水の旅はあった」とあるが、牧水は旅に対してどのような思いを求めていたか。三十字以内で説明せよ。

問三 傍線部(2) 「鑑賞者の立場からすると、反語とどるのは煩わしすぎるし、押しつけがましすぎると感じる」とあるが、その理由を四字以内で説明せよ。

問四 傍線部(3) 「そこに青年牧水の孤独を見る思いがする」とあるが、牧水の心情が最も強く表現されている語句を歌より書き抜け。

問五 牧水の歌に用いられている表現技法の組み合わせとして適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で記せ。

- ア 擬人法―対比―比喻法―体言止め
 イ 擬人法―対比―対句法―倒置法
 ウ 擬人法―対比―区切れ―比喻法
 エ 擬人法―対比―対句法―区切れ

1

問一	①	秀逸	②	③	一端
問二	a	イ	b	エ	ア
問三	相利共生	利益型経済 共生型経済	利潤動機 や貨幣	ニーズ	の充足から人間 変ら
問四	生欲・生活のニーズ	生欲・生活のニーズ	の充足から人間 変ら	満たす欲求に 変わ	
問五	生き欲求が、利益のニーズを 満たす欲求に 変わ	生き欲求が、利益のニーズを 満たす欲求に 変わ	の充足から人間 変ら	満たす欲求に 変わ	
問六	イ	イ	イ	イ	イ
問七	イ	イ	イ	イ	イ

2

問一	①	防御	②	果敢	③	しゅらば	④	ちみつ	⑤	辛抱
問二	はじめ	このよ	う	な	戦	い	終わり	が	勝	敗
問三	リ	リ	ダ	の	気	迫				
問四	リ	リ	ダ	の	気	迫				
問五	ない	戦局	組織	気迫	リ	リ				
問六	A	な	戦局	組織	気迫	リ	リ			
	B	き	あ	の	よ	つ	が	の	う	
	C	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ

3

問一	①	切迫感	②	魅力
問二	を	探	し	求
問三	調	反	語	で
問四	染	ま	ず	た
問五	工			